

和文要旨

論文題目 現代ドイツ語の目的語としての相関詞 *es* の出現・非出現と動詞の選択制限

氏名 井坂ゆかり

本論文は、現代ドイツ語の目的語としての相関詞 *es* の出現・非出現の傾向の原理を、動詞の選択制限に基づいて説明しようとするものである。本論文の分析は、先行研究およびコーパスで収集した実例に基づいて行う。

第1章では、研究対象の目的語としての相関詞 *es* の現象を紹介する。Pütz (1975)の *es* の分類基準に従うと、相関詞 *es* は補文が外置され母文に後続する場合にのみ出現可能である。目的語文と相関する *es* は、動詞ごとにその出現頻度が大きく異なる。Axel-Tober et al. (2016)の実例調査によれば、*dass* 文が後続する場合に、*bedauern*「残念に思う・後悔する」では10%程度、*hassen*「嫌う」では80%程度で相関詞が出現し、*wissen*「知っている」では *es* を伴う例は見つからなかったという。

第2章では、事実性及び相関詞の出現・非出現に関する先行研究を概観する。

Kiparsky/Kiparsky (1970)によると、*suppose*, *claim*, *believe* といった非事実的な述語に対し、*resent* や *regret* などの事実的な述語は、話者が補文命題が真であることを前提としており、この述語の事実性に依じて、統語論的な振舞が異なるという。Kiparsky/Kiparsky (1970)は、事実的な補文は *fact* という名詞を主要部とする深層構造になっており、*fact* に代わる *it* が節の前に出現できると想定している。つまり、相関詞は事実的な述語でのみ出現が可能という仮説である。ただし、事実的な動詞と考えられる *know* や *realize* が、仮説にあてはまらない例外であることも指摘されている。

Kiparsky/Kiparsky (1970)のいう事実的な動詞は、Karttunen (1971)や Hooper/Thompson

(1973)の分析に基づく、さらに、regret などの典型的な事動的動詞と、realize などの半事動的な動詞とに区分される。半事動的な動詞の分類を採用すれば、Kiparsky/Kiparsky (1970)の指摘した例外が解消され、仮説は「相関詞は典型的な事動的述語で出現しうる」と修正される。

Cardinaletti (1990)は、ドイツ語でも Kiparsky/Kiparsky (1970)の仮説のように事動的な動詞に es が出現する傾向を認めている。また、動詞が間接疑問文をとる場合には、es が出現しないことを指摘している。

相関詞 es の出現を意味論的な側面に重心をおいて考察する Sandberg (1998)は、所与の命題に対して評価や態度を表明する動詞では、es が必須であり、発言などを行う行為動詞では es が出ないと考えている。

統語論的な主張を展開する Sudhoff (2003)は、相関詞が出現しうる bedauern 「残念に思う・後悔する」タイプの動詞は、相関詞 es を主要部とする DP の補部に補文があり、相関詞が出現しない behaupten 「主張する」タイプの動詞は、補文が動詞に直接支配されると分析している。

一方、相関詞の出現する動詞としない動詞との区分を、厳格には設けない考え方もある。三瓶 (1985)によれば、通常 es なしと考えられる動詞 glauben 「思う・信じる」や denken 「考える」でも、話者が補文命題を自分の意識の中で、既に確定した話題として認識した場合、すなわち、話者の心的態度が強まった場合には、相関詞 es を伴うことがあるという。

第3章では、事例調査にあたっての問いを提示する。本論文では、Ulvestad/Bergenholtz (1983)が提案するスケールの考え方をもとに、相関詞の出現率を調査する。

第4章では、調査方法を説明する。今回の調査では、IDS (ドイツ語研究所)の大規模書き言葉コーパス DeReKo から、目的語のあるデータを動詞ごとに無作為に 300 件ずつ収集した。調査の対象の動詞の選定にあたっては、Zifonun et al. (1997)の事実性に応じた述語分類を採用している。クラス I より、wissen 「知っている」、vergessen 「忘れる」、クラス II より、glauben 「思う・信じる」、vermuten 「推測する」、クラス III-i より、bedauern 「残念に思う・後悔する」、begrüßen 「歓迎する」、hassen 「嫌う」、lieben 「愛する」、クラス III-ii より bezweifeln 「疑う」、クラス IV より untersuchen 「調べる」、fragen 「尋ねる」の合計 11 個である。

第5章では、調査結果を提示する。今回の調査では、典型的な事動的動詞であるクラス III-i の4つの動詞と、通常非事動的な動詞のクラス II の glauben に es を伴う事例が観察された。

第6章では、調査結果を踏まえ、事例分析にあたっての問いを示す。一つ目の問いは、相関詞の出現率が 0%であった動詞に共通する選択制限はあるか、二つ目の問いは、通常非事動的な動詞 glauben で es が観察された一方、同じクラス II の非事動的な動詞 vermuten で es が観察されなかったのはなぜか、三つ目の問いは、相関詞 es が出現する動詞で、動詞ごとに es の出現率に差があるのはなぜかである。

第 7 章では、本論文での分析の際に重要な概念である選択制限について考える。補文の意味論的なタイプは述語によって選択されるので、同じ補文形式であっても、述語によって解釈は異なることになる。Grimshaw (1979)は、英語の *wh*-文が疑問文と感嘆文のどちらの解釈になるかを分析し、母文の述語の意味論的な選択制限の重要性を明らかにしている。

第 8 章では、事例調査で収集した各動詞の目的語文の分析を行う。分析により、*es* を伴う事例のなかった動詞には、間接疑問文を許すという共通点があることがわかった。

第 9 章では、クラス II の *glauben* と *vermuten* について、追加調査の結果もふまえて検討を行う。*glauben* は、話法の助動詞や否定表現の助けを借りて驚きを表す表現になると、補文が事実的となり、感嘆文をとることもある。一方、*vermuten* は、話法の助動詞や *nur* を伴って、「推測に過ぎない」という、話者が命題の真偽を把握していないことを前面に押し出す表現となると、間接疑問文をとることができる。

以上のように、間接疑問文を目的語として許す動詞かどうかの差異が、相関詞 *es* の出現を許すかどうかの差異にも反映されているといえる。

第 10 章では、意味論的な観点で、疑問が命題の集合とみなせることを確認する。つまり、*dass* 文は 1 つの命題に、間接疑問文は複数の命題に対応していると捉えられる。疑問文を許す動詞と相関詞 *es* とが相容れないのは、命題が 1 つに定まっていないことで、*es* の指示対象が定まらず、*es* と共起しにくいと考えられる。

第 11 章では、事例調査で収集した各動詞の名詞句と代名詞句の目的語の分析を行い、第 12 章で、事例分析の結果全体をまとめる。まず、間接疑問文、すなわち、命題の集合を選択するような動詞では、*es* の指示する命題が 1 つに定まらず、相関詞が出現しにくいと考えられる。次に、相関詞が出現しうる動詞について、その出現頻度には動詞によって差がある。最も相関詞の出現頻度が低かった *glauben* は、通常非事実的な動詞の典型例とされている。しかし、特に話法の助動詞や否定表現とともに用いられると、補文命題が事実的と解釈できるようになり、*es* の出現が認められる。*bedauern* の目的語全体を見ると、補文と対格名詞句の出現頻度は同程度だが、*begrüßen*, *lieben*, *hassen* では、いずれも対格名詞句と代名詞の目的語が約 9 割を占め、補文の使用自体がかなり珍しい。また、名詞句、代名詞が特定の人物を表すケースが多くあり、対格名詞句がもっぱら出来事を表す *bedauern* とは異なる。とりわけ、*lieben* と *hassen* は特定の出来事を表す名詞句ではなく、特定の人物、または、種類を表す名詞句をその目的語とする。そのため、これらの動詞では、目的語として名詞的な表現が用いられるという期待がある。相関詞の出現頻度が高いのは、補文が後続する場合、その期待に反しているため、すなわち、有標であるためと考えられる。

第 13 章では、本論文の主張を振り返る。本論文では、動詞の選択制限の考え方に基づいて目的語の全体像の把握に努め、*es* が基本的に 1 つの命題を指示すること、また、相関詞 *es* が総じて有標性のマーカーとして捉えられることを提案した。相関詞 *es* は、母文に後続する命題を表す補文が、通常その動詞で期待される目的語の意味論的タイプおよび形式から逸脱している場合に、出現率が高くなる。今回の調査で扱えなかった動詞については別途

検証の必要があるが、動詞の選択制限という普遍的な考え方に基づいており、同様の方向性の説明が可能であると期待される。